

第1回地域材利用推進協議会 議事録（公開用）

第1回地域材利用推進協議会は3月9日に実施し、講師を招いて地域のブランド化に関する講義、および文献と地形解析を用いた早生樹の生態および利用に関するとりまとめと課題の洗い出しを行った。

- 日時 平成30年3月9日（金）15：00～16：40
- 場所 日田市複合文化施設アオーゼ2階 会議
- 参加者

所 属	氏 名
日 田 木 材 協 同 組 合	小関 明生
協 同 組 合 日 田 家 具 工 業 会	河津 啓治
	中村 広樹
大 分 県 西 部 振 興 局 農 山 村 振 興 部	青田 勝
	末光 良一
	石田 陽一
大分県農林水産研究指導センター林業研究部	佐藤 幸志郎
日 田 市 農 林 振 興 部	江崎 五郎
大分西部森林管理署（オブザーバー）	益田 健太
	甲斐 孝生
正 プ ラ ス 株 式 会 社	稲本 正
	兼子 博将
日 田 市 農 林 振 興 部	橋本 哲治
	五藤 和彦
	永楽 智史
ア ジ ア 航 測 株 式 会 社	矢部 三雄
	塚原 正之
	久下 玲奈
	五十嵐 卓郎

● 地域材推進協議会概要

1. 挨拶
2. 講師紹介
3. 講演【日田家具のオンリーワンブランド化に向けた考察】
4. 各地域における早生樹のとりくみ
5. 質疑応答

● 議事

1. 挨拶

2. 講師紹介

稲本 正氏

1945年 富山県生まれ。立教大学卒業後、同大学勤務。

1974年 「人と自然、道具、暮らしの調和」を求めて工芸村「オークヴィレッジ」（岐阜県高山市清見町）を創設、代表となる。お椀から建物まで幅広い工芸を展開する一方、植林活動を行い地球環境における森林生態系の重要性を発信し続ける。

1999年 長年の環境保護運動の功績により「みどりの日」自然環境功労者表彰受賞。

現在、岐阜県教育委員会教育委員、東京農業大学客員教授、立教大学「立教セカンドステージ大学」教員、一般社団法人 日本産天然精油連絡協議会専務理事などを務める一方、人と森との共生・健康に繋がる日本産精油「日本の森から生まれたアロマ yuica(ゆいか)」の発信に注力している。

著書

『日本の森から生まれたアロマ』（世界文化社）

『森の惑星』（世界文化社）

『森の旅森の人（世界文化社）』

『森と生きる。』（角川書店）

『ロハス・シティの夜明け』（マガジンハウス）

『心に木を育てよう』（PHP 研究所）など多数

3. 講演【日田家具のオンリーワンブランド化に向けた考察】

この事業は5年間とのことで、5年後はオリンピック後となる。日本の経済はオリンピックまでは大丈夫と言われている。オリンピック後のことを意識しながら、目の前のこと、先のこと、5年後のことを考える。

経歴としては、もともと原子物理学を学んでいたが、趣味で山小屋を作ったところ、すごく面白くなった。そこから大工へ弟子入りし、1974年に農家の納屋に「オークヴィレッジ」を創設した。最初は木工だけでなく、田んぼもやる、木も植える、藍染めもやる、羊も飼う、あらゆるものを行う工芸村を作ろうとしたが、最終的に木工に集中することになった。

何かを行うときは「突破口」を見つける必要がある。辞書の間違い「オーク」は「カシ」ではなく「ナラ」であることに気付いた。これに加えて「漆」を英語にすると「ジャパン」であることを知る。これをきっかけに英国の家具に負けないような、漆を塗った家具を作れば、世界へ輸出できると思った。これが「オークヴィレッジ」の名前の由来である。

紀伊国屋で展示会を開催し、「ライティングビューロー」が大盛況となった。その後、その半生が朝の連続ドラマのモデルになり有名にもなった。そこで3原則を掲げた。

- ・ 100年かかって育てた木は100年使えるものに
- ・ どうせやるなら幅広くやる。お椀から建物まで、木をまんべんなく使う
- ・ 子ども一人にドングリー粒。家具を一つ作れば、木を一本植える

このようにブランドを作れば、高くても売れるようになる。

バブル後は林地残材等を利用して、原価の安い小さな「木工のおもちゃ」を製作するようになった。他には教育に力を入れており、木のことをみんなに分かってもらう必要があると考えている。

トヨタを例にすると、トヨタは世界トップクラスの企業であるが、若者の車離れ、少子化による需要縮小に悩み、焦っていた。これを指摘したのが Rei・Inamoto（稲本講師のご子息）で、車の販売を諦め車を貸す、売ろうとせずに、ドライブするための拠点、人が楽しく集まれる場所を作ることを提案した。

デザイナーである Rei・Inamoto の言葉から成功するための言葉を5つ挙げる。

- ①理念を明確にして、曲げることをしない
- ②異なり、矛盾したジャンルの融合を試みる
- ③自分の弱点を強みに変える
- ④あくまでもポジティブに
- ⑤『0から1』、『9から10』を視野に

よそ者が来て、何かを教え、作ってもよくなる。その土地の人が本気でやる気になってそれをいかに手伝うかが重要。ただ、地元だけでは見えないこともある。ローレンジのことはある程度ヒントがあったほうが良い。外部の話を聞いてヒントにするような気持ちは必要だが、あくまでも自分たちでやる。

日田家具のコンセプト「ひとに寄り添い たしかな技とともに かんしゃを胸に刻みぐっと五感に響くものづくり」は大切にしたい。曲げてはダメ。ずっとやり続けるとこれがスタイルになる。「山と木のひたりに水 水のひたりに町並み・祭り・温泉にひたる」この日田リズムも大切に、外から俯瞰的に見た大きな方針をもう一度考え直すことが必要。

今、日田ではどのようなことが問題になっているかを丁寧にみる。どこに問題があるか。例えば、椅子張りなどは得意であるが日田の材は使っていない。その一方で、木材組合や林業は日田の材を使えという、ここに矛盾がある。日田には隠れた財産（技術）があるかもしれないが、皆まだそれを探していない。

今までの常識にはないものが、まだどこかに隠れていたりする。ローレンジで実施するときは、このような考え方をしてもよいと思う。見つからないかもしれないが、「志」。オリンピック後も含めて、本当に日田の産業が伸びるためには、他にはない、ここでしかないものは何か、という目でやってみて、3年後、4年後、オリンピックが終わる頃に、もう一つ新しい「決め球」を発見する必要があると思う。

軍医であった父親はロシアで捕虜となった。そこで学んだことは、生きて帰った捕虜は全員何が何でも生きて帰ってやる、という強い意志を持っていたということ。ダメかと思った人は皆死んだ。死人が増えるとノルマは残った人に課せられ、全員がつぶれていく。5年以内には帰国できる、というように目標ができると人は頑張れる。

今回も5か年でローレンジの計画を作る。今やっていることで中期の計画を作り、短期はそれぞれの会社の責任として行う。仕事の分け方をよく考えながら組み立てると絶対に方法はできると思う。

人は聞いたことは忘れる。見たことはまだ、思い出す。体験して覚えたことは忘れない。日田の方針は、皆が自分で体験して出したら、絶対に忘れない。ぜひ体験して自分たちで切り開いてほしい。そのために私たちは手助けをする、このことを理解してほしい。

4. 各地域における早生樹のとりくみ

各地域における早生樹の取り組みとして下記の5種の樹種を紹介した。

クリーンラーチ（北海道）：カラマツとグイマツの交雑F1、成長が早く、成長が早く、野ネズミの食害に強いなどの両方の形質を受け継いでいる。

センダン（近畿・中国、熊本）：芽かきを実施することで幹を直通に矯正できる。

○コウヨウザン：萌芽更新により、短伐期施業が可能

○チャンチンモドキ：萌芽更新により、7～8年の短伐期施業が可能

○ユリノキ（大分県）：大分県にて指針作成

これらは土地要求度が高く、土地要件によって成長量の変動する。このため、土地要求度を、地形要件に置き換え、「年積算日射量」「湿潤度」「露出度（風あたり）」として、ユリノキの現地調査結果と比較検証を行い、現況の倒木が目立つ林相を露出度（風あたり）によるものと検証した。

全国天然木化粧合単板工業協同組合連合会による早生樹の木材利用として、フローリング・ツキ板、インテリアの試作が行われた。ここからチャンチンモドキの個体差により割裂があること、アンケート調査結果から家具材の評価には環孔材のような「木目」が重視されることがわかった。

5. 質疑応答

日田家具工業会

3年ほど前から、将来に向けた取り組みをしたいと考えて活動している。同じ業界の中でつながりを持つことで、新しい取り組みができるのではないかと、それが何かと（活動を）始めて来た。日田は家具の産地というが、自分たちの足元には何があって、何がブランドになっているかということを考えてきた。自分たちが日田の産地について勉強し、展示会で紹介するという取り組みをしてきた。今後は日田の職人さんにいかに付加価値をつけるかというような取組をしたいと考えている。稼げるような業界にして、家具づくり、モノづくりをする人たちが集まるような地域にしたい。この協議会で得たつながりで、また新しいと取り組みや方向性が見つかればと思う。

今回、家具工業会さんとの話や工場を見学させていただく中で、地域材と家具作りはなかなかマッチングしないことの認識はある。その認識を踏まえ、林業研究部より、新しいマテリアル等を含め、トピックや紹介があればコメントをお願いしたい。（アジア航測）

林業研究部

早生樹の研究は長年取り組んでおり知見もある。早生樹をどのような活かすかといった利用方法が悩み。日田家具工業会をはじめ、出口として使っていただける民間の方とのコラボレーションが持てたらと思う。早生樹の今後の利用方法の切り口として「木目」があるかと思う。センダンの「木目」は一般的によいと言われている。ケヤキの代替材のイメージとして日本人の木目の感性に対してよいと言われる。大分県の取り組みとしてユリノキ、チャンチンモドキは木目としてはそこまで言われたい。ユリノキに関しては木目がボヤっとしている。家具材としての「木目」の価値について、ユリノキ、チャンチンモドキの木目の特徴と見解について講師より意見を頂きたい。

→ユリノキ、ホオノキは散孔材である。ナラ、クリ、ケヤキは環孔材で木目がはっきりし

ている。センダン（環孔材なので）木目が非常に良い。早生樹で素直でケヤキに似たものがあるとは素晴らしい。チャンチンは材が固く、のこぎりを挟むため、職人は嫌がる。センダンは加工もしやすく優等生。ユリノキ等の散孔材は引き出しなどの内側の部材として使用するなど、適材・適所で使用できる。幹だけでなく、枝葉なども含めた、有効利用。例えば、節などの欠点があったとしても強度があればソファーの中の部材として有効利用すればよい。

カスケード利用と言って、2 つ大きな意味がある。（ひとつは）森林のなかで様々な樹種をそれぞれの樹種の特徴によって使い分けをする方法。例えばアロマは枝葉から成分を抽出するため、3cm 以上の枝や丸太は使えない。（目的により）樹皮のみ利用する場合がある。

（このようにカスケード利用のもう一方は）一本の木の中でも有用とそうでない場所の使い分けを行うことで、森をすみずみまで利用することができる。

今までと同じ概念だけで研究してはだめで、異種のもを付け加えるなど。センダンの木目はよい。（稲本講師）

→センダンは（熊本県で研究が進んでおり）大分県では遅れている。

→飛騨とは違って大分県であれば（気候的に）大丈夫。（稲本氏）

日田市商工労政課

IFFT の展示会でもアンケートでは認知度が 2~3 割と低かった。3 年目となる来年度の取り組みで知名度をあげるように支援を行いたい。

日田木材協同組合

最近、外材の広葉樹が入りづらくなっている。3 年ほど前からお互い交流をして家具工業会へ見学も行った。また、林業研究部でスギ・ヒノキを使った家具の使用について研究頂いているので、使用量は現在数パーセントではあるが、これを機会に地元のスギやヒノキを使って家具を作っていきたいと思う。

センダン等の木材の取扱いは（アジア航測）

→今のところそのような材が市場に出てくることはない

大径木のスギは市場に出てくることはあるか（稲本氏）

→結構多く出ている。尺以上のものが（全体の）20%くらい

→それは利用できそう。合板・ツキ板。震災で東北の合板会社が飛騨へ移ってきた。ほとんど針葉樹の合板で、外国の合板に負けない値段で出し始めている。針葉樹が主材となっており、大径であるとなお、効率よく使用できる。（稲本講師）